

柔構造の先賢

周布政之助 (二八三—一六四)

(4)

藩財政のたて直しに政之助は政務役筆頭として所謂安政の改革に努力したが、後だての清風死亡し保守派の反抗により挫折した。時に安政二年十月二十一日(一八五五)これより先十月痔疾の湯治と浅田観音山の祖先の墳墓に参拝しようとして、二十一日間の休暇を出し許される。子昌三郎(繁沢の養子となっていた)と共に十月十日祖先の墓を拜し十一日清風の墓に詣でたという。湯本温泉湯治中江戸安政の大地震の報を受けると休暇を返上し、十八日には湯治を止めて急ぎ帰萩するが、風邪にかかり痔痛益々ひどく苦しんだという。十二月逼塞の嚴命をうけ門戸を閉鎖して謹慎することになり、謹慎中の心掛け九ヶ条のあり方を伺っている。

- 1、近所に火事が起った時屋根へ人をあげ模様見をしてもよいか。
- 2、近所の火事の時、火消しを手伝ってもよいか。
- 3、家内に病人が出た時医師の往診を許してもらいたい。
- 4、用事が出来た時親類一人出入りさせてもよいか。
- 5、飯米米搗を許されたい。米や薪の買出しを許されたい。
- 6、借家人との間の門戸をしめ切るが、借家人本人のみは出入させてもよいか。
- 7、昌三郎を養子に出したが同居している間はよいが、養家へ行ってからも出入させてもよいか。等これによりて昌三郎が養家へ出入のことは許されたが繁沢養父のあつかいをどうするかと更に質している、きびしいものだ。

政務役を免官されて一年二ヶ月後先大津代官を命ぜられた。当時藩内を十六区割に分けていたが、先大津(今の日置町油谷町)の代官の政之助の席次が第一席であった母八十歳の誕生祝に吉田松陰が親孝行であるとはめて喜びの辞を述べているのが残っている。

代官在任中烈婦登波の表彰、捕鯨の方法の研究、洪水で破壊した堤防の修築等の実績をあげて、安政四年九月二日新しい要職についた。

齊藤 元 宣

道之在天者日也其生人者心也
有氣分無氣則死故生者以
聖氣生 齊藤元宣書

(繁沢家に残されている書)

文芸

清風句会

三光

天 露けさや我に戻りし我が心 千代

暑さに弱い作者は、特別な今年の暑さに参って句作どころではなかったが、露おく頃の昨今、心も我に戻って、又句心が湧いて来た。実感である。

地 主婦昼寝繕い物を枕辺に 梅雪

繕い物をしていた主婦だが、昼寝をするにも繕い物を枕辺に置いている。きりのない主婦業の嫁へのいたわりが見える。

人 亡き母に亡き父買し盆灯籠 ひで

先立った母に、盆灯籠を買ってやった父も、今は亡き人である両親の冥福を祈る心がよく表現されている。

五客

掃苔や無縁の墓地も併せ掃く 句一

山上に迎火燃ゆる南明寺 元

墓洗う兄弟すでに翁なり 元

十哲

白痴の子つれて参るや地藏盆 兎史
ふるさとへ便りなかなばの昼寝かな よし子

髪切りて日焼けの顔の目立つ子等 信子

冷蔵庫何時もまんたん夏休 茂子

夏病に午後の日射や二階窓 ゆか

心なき人の訪れ昼寝どき 千代

盆準備孫の笑顔を待ちながら さつき

暗闇にまぎれ飛び入り踊りをり 句一

いつしかに昼寝覚めいてい草の香 九重

点滴に腕棒となり盆終る 元

蟬穴を出る月明の泥負いて 兎史

七年忌色や、あせぬ盆提灯 よし子

選者 吉村 隅川

人事異動

九月一日付(旧)

民生課長兼戸籍係長 末永周二

(民生課長兼同和对策係長) 経済課長兼農業委員会事務局長 中野博文

税務課長補佐兼徴収係長 (経済課長) 磯野弘子

(民生課長補佐兼戸籍係長) 建設課工務第二係長 角木 裕

(経済課圃場整備係長) 民生課福祉係長兼同和对策係長 田村光俊

(建設課管理係長) 建設課管理係長 前田晃宏

(経済課農産係長) 総務課係長同格 上本藤子

(税務課徴収係長) 経済課農産係長 松田吉彦

(教育委員会) 農業委員会事務局 山田利夫

(建設課工務第二係長) 経済課構造改善室圃場整備係 吉見繁夫

(税務課) 税務課 河辺保則

(農業委員会事務局) 民生課 熊野和正

(教育委員会) 給食センター所長 上田正紀

(民生課長補佐兼福祉係長) 宗頭文化センター所長 佐々木勝

(給食センター所長) 教育委員会総務課 河添隆信

(総務課)



秋の食欲の秋

mi